

小口融資における外部者の関わり方に関する研究

- ザンビア・ルサカ市貧困地域でのドナー主導型と住民依存型の比較から -

菊地 めぐみ

1. 研究の目的と方法

本稿の研究の背景には、筆者が関わったザンビア国ルサカ市未計画居住区（コンパウンド）に暮らす貧困層の女性を対象とした収入創出活動の失敗がある。活動に参加した当初は、外部者主導が活動の成功に繋がるという思い込みがあり、それが当事者の理解を妨げ、活動自体が頓挫した。その失敗から、地域の人々を主体にした開発には、人々が生きる地域社会の特性を理解した上で、人々の既得の手段と知識に基づいて活動することが必要不可欠であると考えに至った。よって研究の目的は、コンパウンドの社会構造とコンパウンドにおける金銭的な相互扶助関係について調査・検討することにより住民間の互助関係を明らかにし、さらに資金融資の結果を分析することによって、住民依存型の取り組みが住民の組織形成に関する能力開発に繋がることを明らかにすることである。

研究の方法は、まず、ルサカ市内のコンパウンド形成の歴史を文献調査によって纏め、研究対象となるチャザンガコンパウンドとチパタオーバースピルコンパウンドが属するムプルング区の特徴を明らかにする。そして、同区の社会構造をヒアリング調査し纏めることによって、コンパウンドに存在する住民間の相互扶助関係を考察する。また、住民に浸透する金銭的な相互扶助関係チリンバの由来から実施形態までを文献及びヒアリング調査し、その結果を分析することによって、住民にとってのチリンバの意義と役割について検証する。続いて、開発組織への住民の選考と能力を比較するため、ドナー団体によるブループリント型の資金援助と、筆者が実施する住民依存型の資金援助の事例を研究する。双方の規範や住民の負担と分担の違いを視点に、住民が利用し易く持続可能な資金援助のあり方について考察する。その上で、住民間の相互扶助関係が存在しチリンバが浸透したコンパウンドでは、ブループリント型の資金援助よりも住民依存型の資金援助の方がより持続的であり且つ住民の能力開発に繋がることを検証し、チリンバを応用した住民主体の持続可能な貯蓄貸付の仕組みを結論の中で示唆する。チリンバや住民依存型の資金援助には余剰を生み、それを移転する仕組みがあるのか、ないとすればそれを制度化できる可能性はあるのか、これは住民が自らの手で持続的な貯蓄貸付を実施する上で重要であり、本研究の視点でもある。

2. 論文の構成

第1章 序論：問題の背景

第2章 研究の目的と方法

第1節 研究の目的

第2節 研究の方法

第3章 未計画居住区（コンパウンド）の形成と構造

第1節 形成過程

第2節 ムプルング区の社会構造

第3節 ムプルング区におけるチリンバ

第4章 コンパウンド住民の組織選考と能力

第1節 事例研究の視点

第2節 ドナー団体によりデザインされたブループリント型の資金援助

第3節 慣習制度を応用した住民依存型の資金援助

第4節 事例の比較

第5章 住民による貯蓄貸付への提言：結論にかえて

3. 論文の概要

第1章「序論：研究の背景」は、筆者が女性グループの収入創出活動に関わるようになって最初に感じた疑問から、ともに活動するうちに見えてきた「気づき」までの経過を、自身の活動を批判的に振り返りながら纏める。そこには、慣習的な組織を利用した住民依存型の取り組みが住民による自主的且つ持続可能な事業に重要な役割を果たすのではないかという仮説が含まれる。

第2章「研究の目的と方法」は、仮説を証明するための研究の方法について簡単に述べている。（1. 研究の目的と方法参照）

第3章「未計画居住区（コンパウンド）の形成と構造」は、コンパウンドの形成過程と社会構造を明らかにする。まず、ルサカ市内のコンパウンドの形成過程と、本稿の調査対象地域であるチャザンガコンパウンド及びチパタオーバースピルコンパウンドが属するムプルング区の地理的特徴を、文献及びヒアリング調査から纏める。次に、ムプルング区に

における秩序維持とその組織、経済活動とその組織、社会活動とその組織、娯楽・文化活動とその組織、それぞれの組織の費用の捻出方法や費用負担と役割分担、部族間の関係、性差等の社会構造について文献及びヒアリング調査し、住民間の相互扶助関係を明らかにする。そして、ムプルング区でのチリンバに焦点を当て、チリンバ発生の由来を文献調査から明らかにした上で、今日の実施形態（グループ形成、組織の特徴、継続期間、メンバー、社会関係、実施方法）を纏め、コンパウンド住民にとってのチリンバの意義と役割を分析する。

第4章「コンパウンド住民の組織選考と能力」は、ドナー団体によりデザインされたグループプリント型の資金援助と住民依存型の資金援助の事例を、融資を受ける条件、負担と分担の条件の違いを視点を比較研究する。グループプリント型の事例として、FINCA Zambia Ltd.と Prime Circle Enterprise の二つの事例を取り上げ、慣習制度を応用した住民依存型の資金援助として、チャザンガコンパウンドとチパタオーバースピルコンパウンドにおいて筆者が実施する資金援助の事例を取り上げる。そこから得られた知見は、(1) 大規模なグループプリント型では、高い利子率と返済率を維持するための形式制度の整備が不可欠であること、(2) 小規模で慣習制度に則る住民依存型の場合、高い返済率と低い利子率を実現できること、(3) ドナーによる大規模な支援組織は住民に融資へのアクセス（市場機会）を与えたのに対し、小規模な住民依存型組織は住民に学習過程の機会を与えたこと、などである。

第5章「住民による貯蓄貸付への提言：結論にかえて」は、住民依存型の小口融資の方が住民自身による組織形成を期待することが可能になることを結論として述べている。グループプリント型の小口融資はドナー団体が設定した制度に依存しているため、住民自身による制度化の訓練がなされず、余剰を生んでも移転することができない。一方、住民依存型の小口融資に参加している女性たちは、余剰を生み、それを他者に移転しようとするまでに至った。住民にはチリンバでの相互融資の経験が潜在能力として備わっており、住民依存型の取り組みが学習の場となって、更なる能力開発に繋がったのである。今後の発展の展望として、慣習に基づいた住民による貯蓄グループの形成と貯蓄制度の構築を提言する。

当事者を信じて任せることが、本研究の出発点であり柱でもある。外部者には数字的な成果主義に囚われず、地域住民が開発事業の主役だと十分理解した上で地域住民と向き合うことが求められる。そして、地域社会の特性を見直すことで、継承され、経験として蓄積された慣行の存在に気づき、住民の能力を信じて任せることが可能となる。住民依存型のアプローチが住民に更なる学習過程の機会を与え、住民の能力開発に繋がることを実証したところに本研究の意義があると考えられる。